

第10回 景観専門委員会 議 事 要 旨

【日時及び場所】

日 時：平成20年10月2日(木) 14:00～16:00

場 所：くにびきメッセ 5階大会議室

【出席者】

景観専門委員会

布野委員長、藤岡委員、藤田委員、松本委員、吉田委員

行政関係者

国土交通省出雲河川事務所：林事務所長、土江大橋川コミュニティーセンター長

島根県：玉串土木部次長、佐藤斐伊川神戸川対策課長

松江市：中村副市長、清水市長室長、松本市長室次長

事務局

国土交通省出雲河川事務所大橋川改修推進室

島根県土木部斐伊川神戸川対策課

松江市市長室大橋川治水事業推進課

【一般傍聴者及び報道関係者】

一般傍聴者：38人

報道関係者：8社

【議事次第】

開 会

挨拶(国土交通省出雲河川事務所長)

議 事

1. 原寸模型について

2. 「大橋川沿川の景観形成に関する整備方針」について

閉 会

【配布資料】

資料1 大橋川沿川の景観形成に関する整備方針(案)

資料2 大橋川沿川の景観形成に関する整備方針【基礎資料編】(案)

参考資料1 第9回景観専門委員会 議事要旨

【議事概要】

1. 原寸模型について

- ・実物大の模型を見ると、背後のまち並みと護岸の規模を感じられて良かった。
- ・パラペットは、舗装のない状態だと少し高いと感じたが、舗装が30センチある場合は高いとは感じなかった。舗装が50センチの場合はむしろ低いと感じた。
- ・パラペットがあっても、堤防上の道路敷からは水面が意外と近くに見え、背景となる対岸のまち並みも対岸の護岸ラインとすれすれだったので、対岸のまち並み全体を見るのには差し支えないと思った。
- ・舗装により道路敷が高くなれば、パラペットは意外に低く、道路敷からは水辺、水面ともに良く見えた。背後側からの見え方については、背後地盤との関係もあり、まちづくりとの長期的な課題になるが、堤防の上からは意外に違和感はない。
- ・水辺から見ると、パラペットが肩のところにありと圧迫感があるので、パラペットの位置を背後側に少し引き、ヤナギ等の植樹も含め細かな工夫が必要であると感じた。
- ・水際のところへ降りられるようにパラペットに若干空きがあると良い。
- ・パラペットは、松江に相応しく景観的に工夫したものになれば良いと思った。
- ・如泥石には、波消し作用や、上を歩くことが出来るなど、いろいろな機能があると思った。
- ・如泥石にはほっとさせられる。
- ・水際に如泥石を置くと、通常の捨石護岸より親近感が持て、水面との近さを感じた。
- ・少し離れて見ると、堤防の高さは目立たなくなるが、一連区間でつくことを考えた場合、延長方向の単調さを防ぐことが、具体的なデザインでは重要になる。現状の石積みは、区間毎に色などが違っており、現状の護岸を参考にしながら、細かなデザインの検討を積み上げることが重要であると感じた。

2. 「大橋川沿川の景観形成に関する整備方針」について

< 4. 今後の大橋川景観形成に向けての前提事項について >

- ・(2)のまちづくりとの連携について、「景観形成を検討する上で重要な要素となる施設」以降、括弧書きで書いてある施設は、大橋川沿川のポイントとなる施設であり、その景観検討については、今後の課題として残っている。このようなアクセントとなる景観については、設計段階に詳細に検討するというような内容を盛り込むと良い。
- ・多賀神社などポイントとなる場所は、平面的に見てデザインする必要があり、そのような観点での検討は、別途詳細設計の段階でする必要があるということを、(2)の項目に書き加えれば良いと思う。

パースで示している堤防の形状で区間全体を一律に整備するというのではなく、ポイント毎で柔軟な形が必要であると考えている。背後のまちづくりや背後のアクセントとなるような景観と併せて、堤防の形状などを柔軟に決めていくという主旨の文章を考えさせていただきたい。

- ・(5)河道計画との整合についての 、 、 の内容は、整備の順序という理解で良いか。改修に当たっては、 、 の順番で進めたらどうかと大橋川改修技術検討懇談会で提案していただいております。出雲河川事務所としてはそれを尊重して整備を進める考えです。今後、河川整備計画を策定することになるが、河道計画や整備の順序との整合を図りながら、景観についても配慮していくことを記載している。

- ・ 詳細設計をする中で、当初の方針では整合出来ると思ったものがそうならない場合、どちらかに偏ることがないように調整する、或いは、段階施工のある段階で、長期間ある状態が保たれる場合、その段階においても景観との整合が図れるようにフォローする等、具体的な例示があるのとより方針のイメージが伝わると思う。
- ・ 実際に工事をするするとパースと全然違うイメージになることが時々ある。景観は最後の出来栄で決まるので、設計・施工段階での対応やその体制を書き加えた方が良い。その対応においては、事業主体者だけではなく住民の方や専門家にも確認してもらって体制が出来ると良い。
- ・ 施工段階で、委員会でまとめた整備方針と大幅にずれることがないように体制は必要である。事務局の方で、フォローアップの体制について検討し、お諮りさせていただきたい。
- ・ 留意事項の文章については事務局に検討していただき、最終的には委員長一任という形にさせていただく。

<【基礎資料編】4．護岸・水際の景観デザインについて>

- ・ 島石は調達出来るのか。来待石はたくさんあるのか。
島石は、現在は採取出来なくなっているが、大橋川沿川でかなり使用されているので、再利用は出来ると考えている。来待石は現在も産出しているので、材料の供給は可能と思う。
- ・ 来待石と島石のつぎはぎのような護岸になることはないのか。
- ・ 樹種については、落葉樹が多いと葉が落ちて管理面において困るような気がする。きれいな樹種だけを考えれば良いということではないと思う。
大橋川上流部北岸のヤナギ並木の剪定は松江市で行っているが、落ち葉拾いまではしていない。道路などの街路樹では、地域住民の人が自主的に落ち葉を集めて堆肥にするという事例はある。
- ・ 産卵に適した水深、ポーラスな材質など、魚の生息環境について触れておいた方が良い。
- ・ 水深10センチ、20センチであれば水の透明度が高いので、水際を歩いたときの水面下の見え方を意識してデザインすることは当然だと思う。今後、河道計画や環境保全措置の具体的な形が詰まってきた段階で、景観の視点から、水際の川底の形、深さ、植物、水生植物を統合的にデザインや確認が出来るようにすべきである。
- ・ 風合いのある素材でも距離が延びてくると圧迫感と単調さが出てくるので、素材を変化させる場合には、階段やテラスなどをアクセントにして変化させていくという工夫が必要である。
- ・ 実際に施工すると、パースのように馴染むまで時間もかかるので、施工直後から単調に見えないような工夫は、念を入れて行った方が良い。
- ・ 曲線はサインカーブが続くと人工的になるので、人工的に見えずアクセントがつくような方法に留意する必要がある。

了